【解答上の注意】答案は別紙解答用紙に、左横書きで書いてください。
この問題用紙の余白や裏面を下書きなどに利用してもかまいません。

《課題文》
構造主義は常識を覆す。覆される常識とは何か。それは、初めに主体が存在し、その後に主体が他者との関係を築きあげるという説である。その自己性が定義される。主体に常にすでに他者を卷き込み、「私とは一貫した他者である」と、それ自体で独自に存在するという常識的意味での主体は、構造主義の思考では、解体される。

この主体の解体は、文学を研究するポリシーにおいては、作家の死として語られる。

小説であるが、文字、文字の現象におけるイメージは、作家のまわりに集中している。ある文学作品の説明が、それを生み出した者の人格、経験、趣味、情熱などを示すものである。例えばある小説にはその作者の言いたいこと（メッセージ、人生観、思想）があり、それにつながる作品そのものを読むことと国語の授業では学ばれる。

作家と、彼もしくは彼が生み出した書物とは、同一確認の前と後に位置づけられる。作家は彼自身の書物（作品）の過去であり、作品と書物は彼とその関係なのだ。作家は書物（作品）より前に存在し、書物のために考え、悩み、生きる。作家が生み出した作品は、作家（さらには彼もしくは彼が生きた時代、社会）を反映するものとなる。読むことも批評も、作家の「背後」に作家を発見することが重要であり、作家が見つければ、批評家は（あるいは生前は）勝利することになるのだ。しかしこれが正しい読み方なのかどうだろう。
こうした従来の作家・作品観をバールトは神学的と呼ぶ。
作的の文である作家は神であり、神のメッセージを出現させるのが作品であり、作品を読むとは聖書を通して神の意志を解釈するようなものだからだ。それをバールトは解体する。

神学的解釈は、作家を階層的閉鎖空間においてみる、芸術の深層部には作家がいて、その思想、メッセージによってエクリチュールを支配する。エクリチュール（écriture）は、文学及び文学における著作、文章のことが、前述の一つに、文学、文学作品そのもの、書の習慣を指す。エクリチュールには意味やメッセージが明示されたり合意されたりしており、文脈、文脈写真や映画やエクリチュールとバールトはみなしている。バールト以前は、それから述べるように、バールトを経過ごすはずの今日においても、エクリチュールは作品として作家に向けられると受けてとられてきた。

しかしこのような作品のあるような文脈や文章も常にすでに別の時空、別の作品で発せられ書かれたものである。もちろん使われ方、込められた意味は異なるにもせよ、どのようなエクリチュールもそれ以前に出現したエクリチュールと全く無関係なのかもしれない。例えばロワード・ホーケス監督の『リオ・ブラボー』は前年化粧の作劇部劇としてそれ単独で楽しめるもので、もともとはフレッド・ジンジェル監督、ゲーリー・クーパー主演の原作の映画は、ハイ・ヌーンへの批判として製作された。またケビン・コスターの『バンス・ウィズ・ア・フラグ』はジョージ・フォード監督、ジョン・ウェイン主演の西部劇『探索者』を裏返しにしたような作品である。
映画は作品の一つであるが、エクリチュールとは、それ以前または同時代の他の文化的・言語的活動が端から端まで発している立体的特異空間として考えるべきなのだ。エクリチュールは閉じされている。どこかバールトは、作品に代わり「テキスト」という概念を導入する。作品が単一的・神学的意味（作家＝神のメッセージ）を伝達するためにと一列に並んだ語から一列の対話に対して、テキストは、とりかえれば神のメッセージを核とする。
作品が作家＝神によって支配された閉鎖空間であるのにに対して、バールトがいうテキストとは、対照的に「開かれた」ものだ。テキストが開かれていたなら、作家が自由でさえもあったと思われる物体やその思想も実は暗黒にせよ、それ以前のテキストとの対話が核となる。ある推論やというテキストが初めて教師による生徒の役人に告白形式で物語り、それ以前のテキストでそのような観点がとりあげられなかったとしてもよい。そのような観点が存在しなかったかこそ、それ自体は書かれたのかもしれない。

「いや、仮のよう物語りがこのような説を言っているがかもしれいない。しかし仮にあるとしても、教師の告白によって説が明らかにする形式はなかったと言える。あるいは「生徒の告白」によって説が明らかになる形式が先行しており、それが評判を呼んだから、それに対して「教師の告白」というエクリチュールが生み出されたということも考えられる。

このように、独創的と考えるものでも一定時代や過去のテキストとの対話を踏まえているし、ある種の言葉遣いも前例のあるもの、前例をひっつめたものでありつつある。

（出典著名『ひんとうの構造主義』より）

《問 題》
課題文を読んで、以下の指示に従って答えなさい。
(1) 動物観が常識を覆すと仮の例えのものを200字以上300字以内で解答欄①に書きなさい。
(2) 直接の問いへの答えを、300字以上500字以内で解答欄②に書きなさい。
間：エクリチュールの連関が如何にして生成するかを身近な具体例を挙げながら説明せよ。
2020年（令和2年）度
募集推奨入試試験【語学検定型】問題
海外帰国生徒特別入試試験（B日程）問題
国際バカロレア入試試験【B日程】問題
小論文
2019年11月15日実施

【解答上の注意】答申は別紙解答用紙に、左端書きで書いてください。
この問題用紙の余白や裏面を下書きなどに利用してはおかないでしょう。

課題文
ロナルド・バートルはフランス政府派遣文書関係として1966年5月初め日に1カ月の滞在ですっかり日本に「恋」したバートルは、1967年3月と12月にも訪日して、それぞれ1カ月ほど滞在する。このときの日本での経験をもとに執筆されたのが「最近の国」（表敬の国）という本で紹介されている。26の訪問からなるこの本は、日本文化論として書かれられたものではない。それはバートル自身も述べていることである。日本滞在とそれにともなう書物は彼を西洋の興味のあるものから、解き放たれ、新たな執筆活動（エクリチュール）の転機となった。それだけにこの本は快適に満ちているかと指摘されているとある。

初めの2日、バートルは彼が執筆した「ラフレシア論」（1963年）をめぐる論争に巻き込まれる。17世紀の劇作家の研究は、ソロモン・ストーンのレーヴン・ベーカーが大家として知られていたが、このビギナーが「ラフレシア論」に対して厳しい批判をかかげているに違いない。ある批評家は、ラフレシアの演劇作品を作者個人の生涯としには切り離し、その作品の世界の中で登場人物をとらえ、精神的応用者を観察するというスタイルだった。しかしベーカーは典型的な文学の学術研究、作品の意義を作者の自覚、生活、作者が生きた時代背景を求めるというもので、それが「真の意味」（ただだと詩の意味）だとはみなれていない。この「ただひとりの意味」との論争はバートルはかみつり、悩ましいと思っていた。日本での滞在は西洋の「ただひとりの意味」の重みからバートルを解き放ち、新たな可能性をいましてきた。日本で見出したものが「真の意味」の不在をほのめかしていたからである。

とはいえ、『記録の国』の読者と、日本という実在する国に「日本人」として住んでいる私たちでは気づかなかったり思いつめきもしよかない、日本文化についての洞察をより深く理解する。料理や食事文化についての思索もその1である。

例えば「ご飯」。ご飯は、その物質が変わった食事の麻痺をもとにしてこそ定義されるべき。食べよう、食べようとに感じているのに、素直に取り分けられることはできない。その成立の本質は、断片であり、ややかっせき集合体である。つぶつぶとして蓄積した豆（コーヒー豆とは違う）を粉が絵画のないで配っているのだが、しかし色は白くない、ひっそりと密着した状態で鍋に運ばれているのだろう。 PACKINGがひとつだけ取りずぎてしまいרוくで、残ってばらばらになることはない。一部を残したまま、断片が結びついて立ち生かすだけであるのである。

この『節度ある料理』を食べようとする日本人がいるだろうか。あらゆる料理への誤解の幾多の陳迷が人気の漫画『美味しんぼ』にさえそのような表現はみられない、無理だろう。

その中で「テクストの快楽」という内容を著し、テクストやエクリチュールの批判を官能的とも言える快楽を追求しようとした「食楽の人」であるバートルなのだ。この考察の下で次のようなことが考えられる。次のような（つまり水の入った容器）、心の助け、さらに心をいささか、心をいささか、心をいささか、心をいささか、心をいささかに絡め、そこに料理が織りなす、そこに料理が織りなす、そこに料理が織りなす、そこに料理が織りなす、そこに料理が織りなす。

料理についての思考として「考察構想」中「今日のトマトの皮」などの著作を通じてバートルに大きな影響を与えてきたレヴィストーストは、1965年から彼の実行を「食の論理」を形にする。「食の論理」中での（つまり水の入った容器）の第2巻に「食べものと火を焼くもの」と題されていて、

（出典）[鷲原「ほんとうの構想主義」より]

問題
課題文を読んで、以下の指示に従って答えなさい。
(1) 食事の分析が定まっていないとは、どのようにしてかを200字以上300字以内で解答欄①に書きなさい。
(2) 食事の分析が定まっていないとは、どのようにしてかを200字以上300字以内で解答欄②に書きなさい。
間食の分析を巡る考察と学術研究とはどのように関連するか。